

水産業地域重要新技術開発促進事業（抄録）

（ハタハタの生態と資源管理に関する研究）

村山達朗

日本海におけるハタハタの分布および生態を調査し、資源解析のための基礎資料を得る。得られた資料を基に、本種の有効的な利用方法の確立をはかることを目的とする。本年度は、本事業の最終年度であり、日本海側各県および韓国の月別、年別漁獲統計資料と日本海区沖底漁場別漁獲統計資料の解析を行い、過去2年間の研究結果とあわせて、日本海における本種の漁業実態を取りまとめた。

なお、詳細は「平成2年度水産業地域重要新技術開発促進事業 ハタハタの生態と資源管理に関する研究報告書」（秋田県水産振興センターほか、1990）に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

結 果 の 概 要

- (1) ハタハタの漁獲量の長期傾向には、大きく変動している地域と、比較的安定している地域が存在する。前者の代表には本州北部の秋田県が、後者の代表には本州西部の鳥取県や兵庫県があげられる。この2つの地域は、主漁期や漁獲対象魚の年齢が異なる。すなわち、漁獲量が急減した地域は9～12月の産卵接岸群を対象とし、漁獲量が比較的安定している海域は未成魚対象とし、漁獲量のピークも春季に認められる。
- (2) 韓国では1970年代を境として、本州北部沿岸でみられていた産卵親魚を対象とした漁業から、本州西部沿岸にみられる未成魚を対象とした漁業へ変化した。
- (3) 日本海北部における本種を対象とする底曳網漁業の漁場は200m等深線をはさみ瀬や礁の周辺に形成される。また、底曳網漁業の漁場は、産卵親魚を対象とする沿岸漁場と比較してより南の海域まで分布している。
- (4) 日本海北部におけるハタハタを対象とする漁業は、沖合における沖合底曳網漁業と小型底曳網漁業、沿岸における小型定置網漁業と刺し網漁業がある。このほか沿岸では、ハタハタ角網漁業、輪壁網漁業、ワッカ網漁業などがある。
- (5) 韓国東岸では、1、2月に漁獲がみられないが、3月になると、36°N付近で漁獲され始める。4月になると、漁獲量は急激に増加する。漁場は36～37°Nである。4月から8月までは3月とほぼ同じ漁場で漁獲される。9月になると、漁場がやや東部にも形成される。10月になる

と、漁場は北へ移動し、漁獲の大半が38°N以北に限られるようになる。この漁獲は12月まで継続する。

(6) 山陰沖合では、12月の漁獲量は少ないが、1月になると、全域で漁獲量が増加する。特に、山口県沖や兵庫県沖の漁獲量の増加が著者である。その後、漁場はやや東へ移動し、隠岐島周辺海域では2月から3月にかけて50トン以上のまとまった漁獲がみられるようになる。この漁獲は、5月を最高に日本の底曳網漁業が休漁期となる6月まで継続する。しかし、休漁期明けの9月以降には急減し、1月に入るまで、ほとんど漁獲されなくなる。

(7) 日本海西部における漁労体数は沖合底曳網漁業、小型底曳網漁業ともに漸減傾向にある。出漁日数は、小型底曳網漁業では長期的には一定もしくはやや減少している。他方、沖合底曳網漁業では1960年代後半に一時的に減少したが、1970年代には一転して増加し、1981年には1960年代前半の水準まで達し、その後は安定している。

(8) 秋田県では本種の単価は1970年代前半までは1kgあたり100円以下であったが、漁獲量が急減した1970年代後半以降急激に上昇し、1983年は1,067円、1988年には1,899円に達した。また、生産額は、1975年の22億3,700万円を最高に、漁獲量が過去最低となった1985年には9,100万円と最低を記録した。

(9) 鳥取県では本種の単価は1960年から1976年までは1kgあたり12~50円で推移していたが、秋田県におけるハタハタの漁獲量が減少し始めた1977年からは急騰し、1979年には278円、1989年には636円を記録した。また、生産額は、魚価の低かった1976年までは1,697万円から1億1,465万円まで推移していた。しかし、魚価の急騰した1977年には2億1,372万円まで増加し、再び魚価の上昇した1985年には6億2,366万円となった。1986年以降は10億円前後で推移している。